

寄り添う心も苦しくて

11、5-18
震災ドクター⑤

人・脈・記

jinmyaku@asahi.com

京都府警で犯罪被害者支援を受け持つ警部補、異英人(44)は、東日本大震災から約2週間後、宮城県石巻市の旧青果市場に派遣された。そこは、震災で命を落とした人たちの安置所になっていた。

広い床に、袋に収められた遺体が数百体、並んでいた。身内の確認に訪れた人たちの泣く声が、ときれることはなかった。

異は連日、10組近くの遺体確認や引き渡しを担った。涙をこらえているのだろう。初老男性の眼鏡が白く曇る。若い夫は、物言わぬ妻の顔を何度も何度もみる。

見ている異は苦しくて、言葉が発したくなる。だが、「自分が楽になるために、無用な言葉をかけてはだめだ。ぐとこらえ、黙って寄り添い続けた。重たかった。宿舎に戻り、あつたことを仲間と話し、心にたまったものを吐き出す日々だった。

同じころ、埼玉県にある防衛医大の精神科講師、重村厚(42)も、宮城県内の安置所をまわっていた。災害救援に従事した人が心に傷を負う「惨事ストレス」の専門家だ。

遺体や遺族と連日、接し続ける精神的な負担は特に大きい。だが、安置所の人手は足りず、自らも被災した地元の公務員たちが、異のような口には言いにくい業務の一部を



担っていた。ほとんどは、日頃「死」に直面することなどない人たちだった。

休憩するのを後ろめたく感じる。仕事にのめり込み過ぎる。悪夢を見る。神経過敏になる。これらは、心が押しつぶされかかっているという警告だ。重村は、危険なサインとその対処法をA4用紙4枚の「災害支援者メンタルヘルスマニュアル」にまとめ、担当者たちの相談に乗った。

重村の友人に神宮赤十字病院の心療内科部長、村上典子(48)がいる。悲嘆による心身の不調を診る「グリーンアケア」の専門医だ。村上は6年前、仙台市で開かれた日本集団災害医学会総会で、災害によつて家族を失った人の思いと苦しみについて講演した。

災害で愛する人を奪われると、怒りや自責の念が絡み合った悲しみに襲われる。その壮絶な感情に接する救援者もまた、大きな心の傷を負いかねないと村上は言った。

この講演を、京都府警で危

機管理を担当する警部補、加古嘉信(37)が聞いていた。

加古は16年前、大学生の時に阪神大震災を経験した。全国から救援に来てくれた警察官がかつこよかった。災害対応ができる警察官になりたくて、志した。村上の講演を聞いたのは、警察の仕事の合間を縫って、救命士の資格をとろうとしていたときだった。

目の覚める思いがした。災害時の警察官は、捜索から検視、引き渡しと、人の死にかわり続ける。それなのに、そういう心の傷のことなど考えたことがなかった。

今年1月17日、加古は村上を招いて、京都府警と日赤京都府支部合同の、大災害対応訓練を企画した。毎年行われるが、今年は大きく変えた。大勢の犠牲者の検視と遺族への対応を柱に据えたのだ。

警察学校の体育館に設営した模擬安置所で、遺族に扮した日赤の看護師らが、対応する警察官に怒りをぶつけた。泣きながら質問を投げかけた。ベテラン刑事が思わず涙ぐむほど真に迫っていた。

異は、この訓練に記録係として参加していた。

石巻市の遺体安置所に足を踏み入れたとき、異は奇妙な感覚に襲われた。この光景は見たことがある――。さまざまに遺族の感情に心を激しく揺さぶられながら、「次に自分の心がどうなるかがわかって、対処できた」。2カ月前に、リアルすぎるほどの訓練を体験したからだった。

みんなの手の及ばないところへ。みんなの考えも及ばないことまで。「震災ドクター」たちは、支え合いながら被災地を駆け回っている。

(このシリーズは、編集委員・中村通字が担当しました。本文敬称略)

◆次のシリーズ「時代劇で候」は2面に掲載します。



異英人さん(左)と加古嘉信さん